

テレングト・アイトル著

『詩的狂気の想像力と海の系譜—西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』

(現代図書、2016)

芝山 豊

今日、日本の文学シーンにおいて、嘗て程の情熱をもってロマン主義が語られることは少ないように思われる。しかし、「想像力と海の系譜」を語るこの本には高い熱量を感じる。

それは、この海をめぐる比較文学的論考が、あとがきで著者自身が述懐しているように、決して海を見ることがない内モンゴル出身者によって書かれたことと無縁ではない。

北のモンゴル、モンゴル国出身の同世代文学研究者なら、おそらくは、ロシア語の影響下で考えたであろう文学性について、著者は中国語と日本語を通して、謂わば、三角測量的な手法で考える。ロマン主義についての比較文学的分析の俎上に上るのは、バーク、ゲーテ、ヘルダー、シャトーブリアン、ブレイクといった文学者であるから、英、独、仏の言語も検討されるのだが、それら西洋諸語がどの東洋の言語と比較対照されるかで、世界の見え方はずいぶんと違ったものになるだろう。

テキストの解釈は読者に完全に開かれており、この解釈が正しくて、あの解釈が誤りだということはない。しかし、本書の真価を知るためには、「想像力」と“*imagination*”について、中国古典における「想像」と日本語の近代翻訳語成立過程を通して生まれた「想像」の関係を吟味し、文学革命への影響について、モンゴル語を視野にいれつつ論じる著者の姿勢への共感と、東アジア諸文学相互間に確かにあって、まだはっきりとは見えていない網の目、*modernity* と *imagination* についての *intertextuality* への気づき、あるいは、皮膚感覚のようなものが必要なように思われる。

日本と西洋（クレオール化したものも含む）あるいは、日本と漢文（中国語も含む）といった二項の視座しかもたないタイプの研究者は、この手の本の書評に手を出したくはないと思うに違いない。また、活きのよいアジア現代文学を研究対象とする者も、ギリシャ古典文学から西洋ロマン主義文学に亘る浩瀚な文献や言説に精通していて、東西の碩学たちの面倒な議論も厭わないという自信と気力がなければ、やはり敬遠するに違いない。本書の内容を部分的にとりあげて、粗捜しをすることはさほど難しくないかも知れないが、本書の企図を踏まえ、全体を的確に書評をできる者はかなり限定されているだろう。

かく言う評者も、本書全体を評するだけの力量をもっていない。それでも、敢えて、400頁を超える本書の中の僅か20頁ほどの第4章第3節「サイチングの詩的狂気と海 — モンゴル」について、論評を加えようとするのは、近接領域で三角測量的な手法を用いて、モンゴル文学についての比較文学の可能性について考えてきた者の一人として、著者の勇氣ある挑戦へ一片の敬意を示すべきだと思うからである。

ロマン主義的な「海」の変容を語る章に、鷗外、漱石、魯迅、郁達夫らと並んで登場するサイチング(1914-1973)について、よく知っているという日本人は多くはないだろう。サイチングあるいは、ナ・サインチョクトという名で知られる人物は、日本の勢力下にあったモンゴル聯合自治政府派遣の留学生として日本へ留学し、帰国後、所謂徳王政府の官僚や教員を務めた。戦後はモンゴル人民共和国に留学し、帰国後、新中国の内モンゴルで教育や文芸の近代化に尽くしながらも、文化大革命下ではスパイの嫌疑により強制労働を命じられ、死後、1978年によりやく名誉を回復されたモンゴル人文学者である。

著者は、1940年の秋、東京の太平洋を望む岸辺に立って、泣く母を残してきた故郷の草原を回想し、自

らと民族の未来、己が使命に思いを馳せる「わが哀れなところ」というサイチングの散文詩をとりあげる。その詩と憂いに満ちたハイネの詩「問い」を並べて、東洋大学留学中、英文講読で読んだワーズワースとハイネの直接的な影響を指摘し、サイチングの詩の中に、ロマン主義文学の諸モチーフを抽出してみせる。

日本と日本文学というフィルターを通して内モンゴル近代文学草創期にもたらされたロマン主義というのは興味深いテーマである。著者は、サイチングの詩的狂気が、英雄叙事詩などのモンゴル口承文芸の語り部やシャマンの神憑り状態になって歌う詩境と通底するものだと言及し、その証明として、大胆な実験を行ったことを愉快そうに記している。

2014年、中国人民大学で行われた「サイチング誕生100周年シンポジウム」において、近年、個人崇拜のプロパガンダ詩として、ナ・サインチョクト時代の作家人生最大の汚点として批判の的になっている「毛沢東と握手して」（1952年）と題される詩を、毛沢東の名のかわりにガンディーの名を入れ替えて朗読し、会場の反応を見るという実験をおこなったというのである。

会場全員が知られざるサイチングの「ガンディーと握手して」を聞いて賛嘆したという。ガンディーの代わりにダライ・ラマを入れても、その熱狂と詩的狂気はかわりのないものであったはずだと著者は主張し、以下のように結論づける。

サイチングの「詩的狂気の想像力」によって成就された作品は、時代と政治において矛盾しながらも、作家たちをインスパイヤし、賛否両論を抱えながらも読者を感動させ、楽しませている。そして、冒頭の「わが哀れなところ」で見たように、「海」は、仏教ルートとは違った、ロマン主義文学の諸モチーフとともに、初めて日本を経由して、モンゴル近代文学にも受容されたのである。

「モンゴル近代文学にも」の件はやや勇み足の感を免れない。ここは、やはり、海に限定しても「内モンゴル近代文学」という限定が必要なのかも知れない。いずれにせよ、公式には、サイチングがモンゴル近現代文学の創始者と称されることはない。何故なら、中華人民共和国という国家側からみれば、内モンゴルの文学は、複合民族国家内の一地方文化として存在する民族文学乃至は地方文学として位置づけられるべきものだからである。この位置づけは、モンゴル国で近現代モンゴル文学の父と称されたダシドルジーン・ナツァグドルジ（1906-1937）とは決定的に違う。客観的事実として、ナツァグドルジがモンゴル国（旧人民共和国）の近現代文学の創始者であるか否かは措くとして、モンゴル国で今もナツァグドルジがモンゴル文学の父であると称されるのは、モンゴル国の国語教育の中で彼の作品がカノンとして扱われ、国民文学の必需品たる「文学史」の中で、彼の作品が、西洋型文学の「近代性」を満たすとする解釈共同体が存在していることを示している。

そして、いま、内モンゴルにも、サイチングの作品をカノンと見做すモンゴル人の解釈共同体が存在しはじめている。それは、内モンゴルにも *national literature* が存在すべきだと考える人々にとっては、至極当然のことだと言ってもよい。

隣国に蹂躪される故郷の民を救いたいと願う若者が、日本で初めて「海」に抱かれ、社会改革への強い思いのあったハイネの詩に惹かれ、モンゴル口承文芸の形式と熱狂によって、自分と民族の現在を歌う姿を掬い取る著者の姿勢は、サイチングのカノン化を欲する立場からも、脱構築を欲する立場からも、少し距離を置くものと言えらる。

それ故、いずれかの立場にたつ読者にとっては、物足りない議論に思えるかも知れない。どちらかと言えば後者の立場にたつ評者としては、サイチングの詩作の中の口承文芸の形式と詩的熱狂が、共同体の文学を超えて、ロマン主義的な自我認識とどのような関係にあったのかについて、サイチングの内面に踏み込んで、（日本の読者にとっては馴染みのない人物なので、伝記的事実を補足しながら、）もう少し丁寧に語ってもらいたかった。

さらに、欲を言えば、西洋のロマン主義を特徴づけるオリエンタリズムが東アジアにどのように受容され、変容されたのかについても、その三角測量の結果を是非読みたいと思った。

もっとも、それは本書の埒外で、著者がこれから上梓されるであろう書物に期待すべきものだと思う。

(受付日：2018年2月15日)